

## 春の宵に

鳥居 淳瞳



受賞のことは  
この度は佳作受賞の報をいただき、心から感謝を申し上げたい。  
今年の作品は、今までになくうきうきとした気持ちで書き上げることができた。その分、気持ちだけが先行してしまった部分もあるが、競馬のある平凡な日常を純粹に綴ることができたと思う。私の競馬ライフに笑いと彩りをくれる兄さん、げんさん、うっちゃんに心からの愛と感謝を込めて。

プロフィール  
1986年、和歌山県に生まれる。和歌山工業高等専門学校を卒業後、建設コンサルタントに勤務。愛してやまぬ定では馬券は当たらず、そのツケをすべて夏競馬で回収することから仲間内では「夏競馬の女王」の異名をとる。

——京阪電車をご利用くださいましてありがとうございます。次は樟葉、樟葉です。

車窓からは麗らかな春の陽が射し込んでいる。私はどこか緊張した思いで京阪電車に乗っていた。休日の朝にしてはやや混み合った車内には、浮足立った雰囲気の流れている。「ほんまに会えるんやろか……」

目指す淀駅まではあと三駅。今日は京都競馬場のリニューアルオープンの日である。

「勤続十五年の報奨について」

会社でそんなタイトルのメールを開いたのは、師走の寒い朝だった。メールには勤続を労う文面とともに、少しばかりの報奨金が支給される旨が記載されていた。

「もう十五年か……」

思わずため息が出た。私は工業高専を卒業し、故郷の和歌山を出て大阪にある会社に就職した。仕事はそれなりに楽しかったが、隣近所の顔すら見えない都会の生活は田舎育ちの私を大いに困惑させた。何年経っても都会暮らしは身に馴染まず、淡々と過ごした日々を思うと、報奨という言葉はどこか複雑であった。

「一人で競馬にでも行くか」

そして、深いため息とともに報奨金の使い道も唯一の趣味に収まった。ちょうど翌週は有馬記念だったのである。

有馬記念当日、私は阪神競馬場へ向かった。

「あ、おはようございまーす」

家を出ると、近所で建設作業をしている男性がいつものように挨拶をしてくれた。年の頃は五十路の日焼けした小柄な男性である。十五年前からここには病院があったが、解体して建て直しをするらしい。時の流れを感じながら、私は白い息とともに挨拶を返し、駅へと急いだ。

まだコロナ禍の影響で入場制限がかけられている競馬場は、例年に比べて人が少ない。それでも有馬記念特有の熱気が立ち込めていた。イクイノックスなのかタイトルホルダーなのか、周囲では仲間同士のそんな会話が飛び交っていた。そんな様子を見てみると、実家の近所のじいちゃんの顔が浮かんだ。親戚でもなんでもないじいちゃんとうのは、益でも正月でもない春の帰省の時だった。農作業をするじいちゃんを見つけると、田んぼの畦道に座って天皇賞やダービーの話をした。

「京都競馬場が新しくなるんやで」

そう話したのは改元の大連連休の時だった。

「そうか、友達と行くんか？」

「一人で行くよ。大阪に友達おらんもん」

「淋しくないんか？」

「全然。いつでも帰ってこられるもん」

「そうやな。じゃあまた来年な」

その時のじいちゃんの表情を今でも思い出すことはでき

ない。それほど日常の一コマだった。しかし、その来年はとうとう来なかった。翌年には新型コロナウイルスが猛威を振るい、帰省もままならなくなった。無観客の競馬場を

テレビ画面越しに見つめながら、時が過ぎていった。競馬場にやつと人が戻り始めた頃、じいちゃんが亡くなったことを知った。葬儀に駆けつけるほど親しかったわけではない。しかし、ただ無性に悲しかった。一人で生きてこれたのは、いつでも帰れる場所があったから。会えるはずの人に会えない、帰れるはずの場所に帰れない。まるで、幼い頃に迷子になった時のような、そんな言いようのない淋しさと不安に駆られた。今の私は本当に一人なのだ。

そんなことに思いを馳せているうちに、いつしか最終レースが終わり、報奨金をカバンにしまい込んで帰路についた。クリスマスの大阪は人で溢れかえっていた。

「こんなにも人がいるのに、知っている人は誰ひとりない……」

大阪駅に向かう道すがら、ポツポツと雨が降り出した。環状線を経て京阪電車に乗り換える頃には雨はさらに強まり、車窓に叩きつける雨粒が私の気分をより一層暗くさせた。

——次は枚方市、枚方市です。

「こんばんはー」

駅から家路を急いでいると、激しい雨の中から声が聞こえた。朝にも挨拶をしてくれた作業員だった。

「あれ？ ひよっとして競馬？」

私のカバンからはみ出た競馬新聞を見て、彼は満面の笑みを浮かべながら、私を軒下に手招きして、囲いの中にいる仲間を呼んだ。

「げんさん、うっちゃん、ちよつと来て！」

「兄さん、何？」

兄さん、と呼ばれるからには小柄な彼は一番の古株らしい。中から出てきたげんさんは五十前の人好きのする笑顔の男性、うっちゃんは四十路のクールな雰囲気な男性だった。

「なにになに？ いつも前の道を通るお姉さんやんな？ 競馬するんや！ 有馬記念どやった？」

げんさんの人懐っこい問いかけに、私は思わず面食らった。そんな様子を気にすることなく、うっちゃんが淡々とした標準語で続ける。

「僕はアカイト狙いだったんです」

「うっちゃん、穴党やからってイクイノックスはずしたら当たらんって！」

「僕は宝くじと同じで大きく当てたいんで」

「どうせ俺と兄さんは当たりの小さい小物よ。ほつといて」げんさんとうっちゃんのやり取りに兄さんが手を叩いて大笑いする。

「で、お姉さんは？」

「あ、私はディーポンドが本命で……」

「お姉さんもうっちゃん派かあ」  
競馬ファンとは不思議なものである。初対面であってもカタカナの羅列で会話が進む。有馬記念の話や好きな馬の話、騎手の話、私は自然に会話に参加していた。そして、いつしか彼らとともに手を叩いて笑っていた。

「あ、お嬢来た来たー」

年明けから、私は建設現場にたまに顔を出すようになった。手堅い兄さんとげんさん、一発狙いのうっちゃんと私。予想や買い方は四者四様であった。

「今日はこれが来ますよ」

うっちゃんが相変わらずクールな標準語で淡々と話し出す。「今日は乗らんで！ この前もうっちゃん推しのなんとかトマトで惨敗したやん！」

「え、私買ってみようかな」

「お嬢、あかんって！」

いい年した大人たちが、まるで子供のように笑い転げる。そんな日々を過ごしながら、年々開花が早くなる桜はいつの間にか咲き、そしていつの間にか散っていった。

そんなある日、兄さんが言った。

「淀のオープンの日、お嬢も入場券当たってるんやろ？ みんなで淀に行かへん？」

「もちろんいいですけど……」

「じゃあ九時に淀駅の改札で待ち合わせな」

「また来週な」

そう約束をして、いつものように別れた。帰宅した後で互いの連絡先も知らないことに気付いたが、会えなければそれまでと、どこか諦めに似た思いもあった。

——次は、淀、淀です。京都競馬場へお越しの方はこの駅でお降りください。

この駅にこんなにも人が集まるのを見るのは三年ぶりか。改札へと向かう階段を降りながら、鼓動がどんどん大きくなる。

「あ、お嬢！ こっちこっちー！」

改札を出て左側にいつもの顔が三つ並んでいた。あまりにも普通にやってきた「来週」に全身の力が抜ける気がした。「ほら、あんなゆるい約束でお嬢来たから今日は当たるんちやう？」

「いや、この人は来るやろ。根っからやもん」

相変わらずこの人たちは、と思いつながら自然に笑みがこぼれる。久しぶりの淀の光景に胸を膨らませながら淀の坂が見える芝生の上にブルーシートを敷き、四人で新聞を広

げた。淀の新しい門出を祝うかのように、青い芝に春の陽射しが降り注いでいる。吹き渡る風や体の奥底に響く蹄の音が懐かしい。

「こうやって誰かと酒が飲めて、競馬が見られて、ホンマに幸せやな」

兄さんがビール片手に笑った。酒が強くないのか、第二

レースの頃にはもう顔が赤い。

「これで当たれば言うことなしやね」

そう言うげんさんに対してうっちゃんが表情も変えずに

「げんさんの当たりは小さいから」

とポツリと言い、また皆の笑い声が響いた。

「今が使い時やな」

私は十五年前の思いが詰まった報奨金の袋を開けた。故郷を出て一人で生きてきた十五年。コロナ禍という未曾有の時を経て、やっとここに居場所ができた気がした。

その日の結果は散々で、それでも反省会と称してそのまま自宅とは反対方向の伏見の居酒屋になだれ込んだ。競馬談議に花を咲かせた後、京都方面に帰る皆と別れて、一人で京阪電車に乗って帰路についた。

——次は、淀、淀です。

酔ってうつらうつらしていたところに、電車のアナウンスが聞こえた。顔を上げると、長い一日を終えた京都競馬場が見えた。三年前に想像していたのとは大きく違う京都競馬場のリニューアルオープン初日。電車の扉が開いた瞬間に流れ込んできた春の宵の風に、

「幸せやな」

そんな言葉が口をついた。

——春宵一刻値千金

競馬が見られて、酒が飲めて、笑い合える仲間がいる。私は本当に幸せだ。目を閉じて電車の扉の閉まる音聞きながら、私は春の宵の幸せを噛み締めた。